The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロンドンのソマリランド人コミュニティ組織による危機的状況の対応
Author(s)	須永, 修枝
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2025, 36, p. 70-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』36 号（2025）pp.70-83

ロンドンのソマリランド人コミュニティ組織による危機的状況の対応

Responding to Crisis Situations by a Somaliland Community Organization in London

須永 修枝*
Sunaga, Nobue

0．はじめに

イギリスでは庇護申請者や難民支援のみならず、移民やマイノリティが抱える問題に対応するためにコミュニティ組織が存在しており、政策的にも重視されてきた。本稿でコミュニティ組織とは、第三セクターの領域で活動し、とりわけチャリティ委員会（the Charity Commission）に登録されている組織のことを意味する。しかしながら、イギリスでは 2007 年の金融危機から緊縮政策が行われ、とりわけ 2010 年以降は公的資金がさらに削減されているため、コミュニティ組織がアクセスできるファンドの規模は縮小している（Mayblin and James 2019）。それゆえ、それ以前から資金調達や人員確保の面で課題を抱えていたコミュニティ組織はさらに困難な状況に追い込まれ、人びとを繋げるハブとしての役割を担えないようになるばかりか活動停止に至ることも珍しくない（Zetter, Griffiths and Sigona 2005, 高橋 2020）。

本稿は、資金や人員不足など、コミュニティ組織全体が危機的状況に直面しているなか、ソマリランド人コミュニティ組織がどのようにこの状況に対応しているのかを考察する。ソマリランド人はエスニシティのレベルではソマリ人と考えられるため、ソマリ人コミュニティ組織の特徴を論じてきたこれまでの議論が指摘してきた内容を概観すると、ソマリ人コミュニティ組織は彼らの出身地での対立関係がイギリスにも越境しているため、組織が無数に細分化し、効果的な運営が実施されていないと論じられてきた。この議論を踏まえるならば、ソマリ人コミュニティ組織とは、第三セクターが直面している状況の厳しさにかかわらず、そもそも運営に行き詰まり、活動停止に至ったとしても不思議ではない。まして、緊縮政策の継続により公的資金が減少し、コミュニティ組織全体が困難に直面している状況においては、ソマリ人コミュニティが活動を停止しても当然だとも考えられる。

しかし、本稿で取り上げるソマリランド人コミュニティ組織は、イギリスで緊縮政策が開始された 2007 年に発足し、筆者が調査をしていた 2014 年から 2017 年にもなんとか活動を継続していた。そのため、本稿では彼らがどのように資金や人員不足などの問題に対応し、コミュニティ活動を継続させてきたのかを考えてみたい。

---

* 富山大学人文学部助教（School of Humanities, Toyama University）

なお、彼らが他のソマリ人に対して自らを「ソマリランド人」として差異化することに情熱を掲げているからこそ活動を継続できているという考え方もあろうが、もはやその考え方のみで説明することの妥当性は極めて低いと考えられる。下記のように、このコミュニティ組織の運営に関わる人びとの生活環境は極めて厳しく、途切れることのない情熱をもっぱらコミュニティ組織活動に捧げているとは考えにくいためである[1)]。

１．イギリスにソマリ人コミュニティ組織が増加した背景

イギリスにはソマリ人コミュニティ組織が無数に存在している。チャリティ委員会のウェブサイトで「somali」という単語を検索してヒットする組織は、2024 年 10 月時点で 834 件である。しかし、この件数のなかには既に活動を終了したものも含まれているのに加え、実際に一つ一つの組織がどの程度活動的であるのかは明らかではない。

筆者がロンドンで調査をしている際に、ソマリア北部（現在、ソマリランドとして主権国家であると主張している地域）出身のソマリ人女性がソマリ人コミュニティ組織について、「どこにでもコミュニティ組織はありますが、どこにもコミュニティ組織はありません」と述べたことがある。この女性の考えでは、ロンドンにはソマリ人コミュニティ組織が多く存在しているものの、活動的な組織は存在せず、人びとを代表するものがない。1989 年にロンドンにきたこの女性によると、その当時の人びとは協力的で助け合って暮らしていたが、筆者が聞き取りをした時点では、コミュニティ組織の現状を嘆いていた。なお、筆者はロンドンでの調査中に、この女性と同じ考え方を何度も耳にしてきた。ロンドンには活発に活動し、誰もが知っているソマリ人コミュニティ組織は存在しない。

上記女性の記憶や印象は、イギリスで暮らすソマリ人の増加とも関係していると考えられる。イギリスはソマリア北部の旧宗主国であることも影響し、1980 年代後半からソマリアで紛争が悪化するとイギリスでのソマリ人による庇護申請者数が増加した。その人数は、1985 年から 2010 年までの間、イギリス全体の庇護申請者数のなかで常に上位 10 位以内であった（Open Society Foundations 2015）。1988 年にバーレ政権がソマリア北部を爆撃するようになった時点ではソマリア北部出身者が多く、1991 年にバーレ政権が崩壊すると、1992 年からはソマリア南部出身のソマリ人の数も増えるようになった（Griffiths 1999）。1999 年には過去最多の 7495 人のソマリ人がイギリスで庇護申請をするに至った（Communities and Local Government 2009）。ソマリ人コミュニティ組織活動は、ソマリアでの紛争から逃れてきた人びとへの支援が求められるなかで始められ、次第にその数が増えていったと考えられる。

---

1) イギリスに居住するソマリランドの人びとは、ソマリランドで行われている政党政治に関与していることもあり、そもそも「ソマリランド」という名のもとに人びとが常に一致団結しているわけではないことも影響している（須永 2022）。

増加したソマリ人コミュニティ組織の実態について、上記の女性が「どこにでもコミュニティ組織はありますが、どこにもコミュニティ組織はありません」と述べたことと同様に、従来の研究も効果的に運営されているソマリ人コミュニティ組織がないことを論じてきた。Griffiths（1999）や Hopkins（2006）はロンドンのソマリ人コミュニティ組織は、母国の氏族関係から影響を受けて人びとは相互不信であり、ソマリ人は組織運営に使用する公的資金をソマリ人同士で奪い合うため、各組織は小さな部屋でワンマン運営をし、営業時間が極めて短いなどの問題を指摘している。ゆえに、ソマリ人によるコミュニティ組織活動が一定の規模で継続しているケースは極めて珍しい。だからこそ、本稿で取り上げるように、第三セクターが危機的状況にあるなかでも活動を継続しているコミュニティ組織は、これまで考察の対象とされることはなかったと言えよう。

２．イギリスのソマリ人の特徴

近年、国外に居住するソマリ人の数は 200 万人を超えるとも考えられている（Kleist and Abdi 2021）。そのなかで、イギリスはヨーロッパでもっとも古くからソマリ人が居住する国であり、その人数もヨーロッパで最大である。この背景には、イギリスが現ソマリランドの宗主国であったこと、そしてソマリアで紛争が発生してからは北部および南部出身のソマリ人による庇護申請が増加したことがある。なお、イギリスで難民認定されたソマリ人は、その後に帰化試験を受けてイギリス国籍を取得している。

さらに、イギリスには他国には見られない特徴がある。それは、イギリスにはイギリス国籍以外のソマリ人が暮らしていることである。この背景には、1999 年以降、EU 諸国で難民として認定され、その国の国籍を取得した後に、就業や就学機会を求めてイギリスに移住してくるソマリ人が多いことが挙げられる（Open Society Foundation 2015）。そのため、ロンドンで調査をしていると、オランダ国籍やスウェーデン国籍など、多様な国籍のソマリ人に出会う。ロンドンに暮らすソマリ人の国籍は、本人に聞かない限りまったく明らかではない。

このように、イギリスに居住しているソマリ人の背景は国籍を含めて多様であるが、実際に何人のソマリ人がイギリスに暮らしているのかを詳細に示すことは容易ではない。参考として、2011 年の国勢調査ではソマリアを出生国とした人びとは 97,449 人であった（Office for National Statistics 2014）。ただし、この数にはソマリア生まれの両親から生まれた子どもの数は入っていない。なお、本稿が考察対象とするコミュニティ組織は、ソマリランドという「国名」を掲げているが、ソマリランドは未承認国家であるため、出生国別統計ではソマリアという国名にソマリランドが含まれている。そのため、イギリスでは誰がソマリ人、ソマリア人、ソマリランド人なのかを数字で示すことは難しい。

イギリスに居住するソマリ人の人数は明らかではないものの、ソマリ人は政治、経済、社会的に周辺化されていることはこれまでも問題とされてきた。ソマリ人の雇用率は移民

のなかでも低く、子育ての問題を抱えている家庭も多い（Open Society Foundation 2014）。本稿の冒頭で述べたように、コミュニティ組織は移民などが抱える問題に対応することが期待されてきたが、ソマリ人が周辺化され続けていることに鑑みると、ソマリ人コミュニティ組織は、これらの問題に十分には対応してこなかったとも考えられる。実際に、ソマリ人の生活状況が改善されない背景として、ソマリ人コミュニティ組織の細分化や運営の問題が指摘されてきた（Communities and Local Government 2009）。イギリスのソマリ人コミュニティ組織は評価されることはほとんどなく、その欠点ばかりが指摘されてきた。そのため、ソマリ人コミュニティ組織が活動を継続させるために、どのような対応を試み、実施しているのかについては、やはり全く論じられてこなかった。

３．調査地概要

ロンドンはイギリスのなかでも古くからソマリ人が暮らす場所である。そのなかでも、東部の行政区、タワーハムレッツ（Tower Hamlets）は最も古い居住地であるが、次第にソマリ人は仕事を求めてロンドン西部でも暮らすようになった。筆者が調査をしていたコミュニティ団体があるロンドン西部、ヒースロー空港が位置するヒリンドン行政区（Hillingdon）もそのうちの一つである。なお、2011 年の国勢調査によると、タワーハムレッツよりもわずかに多くのソマリ人がヒリンドンに居住している。

ヒリンドンは、主要幹線道路である A40 を境に「高級住宅街」と「移民街」に分かれると考えられている。ヒリンドンの高級住宅街側にはロンドン東部ではなかなか見ることができない、庭付き一軒家が並ぶ地域もある一方で、移民街側にあるヘイズアンドハーリントン（Hayes & Harlington）駅から徒歩 3 分程にある通りにはパブや教会もあるが、その近くにはモスクもあり、多様なエスニシティの人びとによる店が並んでいる。ここにはソマリ人だけでなく、筆者が会話しただけでも、エチオピアやアフガニスタン、スーダン、コンゴ民主共和国などから来た人びとも暮らしている。調査対象であるコミュニティ組織があるのは、最も移民街らしい場所である。

本稿で取り上げるソマリランド人コミュニティ組織が位置する通りには、この他にソマリ人が運営する二つのコミュニティ組織と一つの会社が数メートルから十数メートルの間隔で立ち並んでいる。一つの会社は、元々はコミュニティ組織であったが、調査当時は会社として運営されていた。他の二つのコミュニティ組織のうち、一つは旧イタリア領出身のソマリ人女性たちにより運営され、もう一つのコミュニティ組織はソマリア北部、つまりソマリランド出身者が事務局の代表を務めていた。しかし、このコミュニティ組織はソマリランドを主張するのではなく、あくまでもソマリ人であること前面に押し出している。

なお、これらの会社やコミュニティ組織は、互いの存在を認識し、人びとが個人的なつながりを持っている場合もあるが、コミュニティ組織の活動レベルで協力することはない[2)]。

４．ソマリランド人コミュニティ組織の活動内容

筆者は、2014 年 9 月上旬から 2015 年 2 月上旬、2015 年 9 月下旬から 2016 年 3 月上旬、2016 年 9 月下旬から 2017 年 3 月上旬に、この移民街の通りに位置するソマリランド人コミュニティ組織でボランティアスタッフとして参与観察をしながら、聞き取り調査を行った。

このコミュニティ組織が掲げている活動使命は、「私たちの使命は、西ロンドンのソマリランダーが、権利と責任を持つ市民として社会に参加できるようエンパワーし、コミュニティの団結を促進することである」。ここで用いられている「ソマリランダー（Somalilander）」とは、ソマリランド人のことである。この組織が掲げる 4 つの活動目的のすべてに、「ソマリランダー」が使われていることからも、彼らは自らをソマリランド人と名乗ることで、ソマリア出身のソマリ人との違いを強調していることが見て取れる。

このコミュニティ組織は、2007 年にヘイズアンドハーリントン駅の近くに、小さな事務所を設けて活動を開始した。2009 年にはチャリティ委員会に登録をし、2011 年に現在の場所に二階建てのセンターを設けた。一階の正面にはカフェがあり、建物の奥に 2 つの事務室と数台のパソコンが設置された部屋がある。主に使われている事務室には 2 台のデスクトップパソコンと 1 台のプリンターが設置されている。この事務室の広さは、4～5 人ならば椅子に座って話せる程度である。二階には英語教室やミーティングの際に使う部屋がある。

筆者が調査をしていた期間、この組織の主な活動はドロップインで来る人びとの様ざまな相談への対応や就職活動をしている人びとへのレファレンス作成、成績が優秀な学生などを表彰するソマリランド功労賞（Somaliland Achievement Award）の開催であった。ドロップインで来る人びとの相談内容は、主に自宅に届いた書類についてであった。

年配のソマリ人にとって英語でのコミュニケーションは容易ではない。例えば、自宅に請求書らしきものが届いても、それが何の請求書なのか、なぜその請求書が届いたのかが分からない。しかし、請求書の発行元に電話をかけようにも、英語での会話が難しいため、電話で内容を確認することもできない。そのため、請求書を持って事務局を訪れ、事務局のスタッフが代行して請求書の発行元に電話をする。たいていの場合、その電話は事務局スタッフが音声案内に従って操作を進め（音声案内も日本のようにプッシュ方式に限らず、問い合わせ内容を声で入力する場合もある）、数分後、長ければ 10 分弱ほど待った後にオペレーターに繋がる。その際に、事務局スタッフは組織と依頼人の名前、要件を伝える。

---

2) ここでのコミュニティ組織の関係については須永（2024）を参照のこと。

その後、請求書を持ってきた人物に受話器が渡され、名前と生年月日を英語で述べ、本人確認がなされ、あらためて事務局スタッフがオペレーターに質問内容を伝える。要件が終わると、事務局スタッフは依頼人に内容を説明する。これが書類に関する相談についての一連の流れである。なお、依頼人に料金を請求している場面を筆者は見たことがない。基本的にこれらの活動は無料で行われていた。

ただし、この事務局は毎日同じ時間に開くことはなく、ドロップインで相談に来た人びとが相談できずに帰ることも珍しくなかった。このコミュニティ組織は、既存の研究が述べてきたような、効果的で安定した運営が行われていないコミュニティ組織に当てはまる部分もある。他方で、このコミュニティ組織は不安定ながらも活動を継続してきた。そのため、このコミュニティ組織が活動停止に追い込まれることなく活動を継続してきた方法を考察することは、脆弱なコミュニティ組織がいかに危機的状況に対応しているのかを考える際の一助にもなろう。

５．危機的状況への対応

ソマリランド人コミュニティ組織は、資金や人員不足など、第三セクターが直面している危機的状態にいかに対応してきたのか。以下では、このコミュニティ組織での活動を担ってきた三人への聞き取り調査をもとに考察をする。

5.1.　資金不足への対応①：メンバーシップ制度導入の試み

ここでは、資金不足への対応について男性 A への聞き取り結果を示す。2006 年にオランダからイギリスに移住してきた男性 A は、この団体を設立した中心人物であり、2015 年まで事務局のコーディネータを務めていた。男性 A は、この地域でソマリランドの人びとが集まることができる場として、そして、イギリスの人びとにソマリランドの存在を知らせるためにコミュニティ組織を設立した。まず、男性 A はこのコミュニティ組織が直面している課題について下記のように述べた。

> 私がこのコミュニティ組織を立ち上げた時、イギリスのボランタリーセクターにとっては良い時代でした。その時はボランタリーセクターが使える多くのファンドがありました。しかし、私がこの組織を立ち上げてから、全てのファンドの規模はどんどん小さくなりました。ですので、私はこの組織を維持するため、本当に努力をしました。それは簡単なことではありませんでしたが、私たちは今日でもここにいます。私たちがここに居続けられることを願っています。

男性 A はコミュニティ組織を立ち上げた時は使えるファンドが豊富にあったが、設立後はファンドがどんどん減少していることを課題として述べている。確かに、このコミュニ

ティ組織がチャリティ委員会に提出してきた年次報告書（対象期間は毎年 4 月から翌年の 3 月まで）には、活動開始当初は獲得したファンドを活用しながらサッカークラブを開いたり、リトリートを実施してきたことが記されている。しかし、2013 年からはファンドの獲得が難しくなっていると記載されるようになり、筆者が調査をしていた 2017 年までの報告書には、運営資金を得られないために、これまでの活動を実施することができなくなったと記述されている。

資金不足という課題に対し、男性 A は 2014 年からメンバーシップ制度を導入し、毎月決まった額をメンバーから集めることで活動を維持する試みを行った。筆者が 2014 年にこの組織でボランティアスタッフとして参与観察を始めた際、はじめて行った作業は会費納入の申し込みをした人びとのメンバーカードを作成することだった。このコミュニティ組織の名前が印刷されたカードサイズの厚紙に、メンバーの名前を書き入れる作業をしたり、この会費納入の状況を銀行の明細書からエクセルファイルにデータを入力したりした。単純に思われたこの作業は、メンバーの名前のスペルと銀行口座に登録されている名前のスペルが一致しなかったり、ミドルネームが省略されていたりして、名前を確認する作業も容易ではなかった。それは筆者がソマリ人の名前に不慣れであったことだけではなく、当時、作業を一緒に行っていた下記の女性 A も混乱すると述べていた[3)]。

なお、筆者が作成したメンバーカードは、本人が事務局に来た場合に手渡しするのみであったが、そのカードがきちんと配布されたのかは確認できていない。また、事務局に来る人びとがある程度決まっていたためか、結局のところそのカードがどのように使われているのかを確認する場面に居合わせることはなかった。カードの配布にしろ、メンバーによる会費の支払いにしろ、それらの作業の責任を持つ人物はいなかった。メンバーシップ制度の導入により、男性 A は運営資金を獲得しようとしたが、その方法を軌道に乗せることは容易ではなかった。

5.2.　資金不足への対応②：助け合いに基づく献金

資金調達の難しさは、男性 A の後任として 2015 年から事務局のコーディネータになった女性 A も述べていた。女性 A も「私たちはセンターを維持するための資金がなく、経済的に苦労しています」と話し、やはり運営資金がないことを大きな課題として捉えていた。

スウェーデン国籍の女性 A は、筆者が調査を始めた 2014 年時点ではボランティアスタッフとしてこの組織の活動を手伝っていた。女性 A がこのコミュニティ組織に携わるようになったきっかけは、2011 年に女性 A が住居問題を抱えていた際、友人にこのコミュニティ組織を紹介されたことである。その際、男性 A が相談に対応してくれたため、女性 A はその恩返しとして、週に一回、火曜日にボランティアをすることを決め、それからこの組

3) ソマリ語は 1972 年に教育キャンペーンの一部として、アルファベットで表記する正書法が導入されたが、実際には個人によって用いるスペルの自由度が高い。

織の運営に関わるようになった。2015 年に男性 A が事務局のコーディネータを辞めたのちは、女性 A がそのポストを引き継いだ。なお、女性 A の背景はロンドンに暮らすソマリ人女性の生活環境を考える際に重要であるため後に説明することとし、ここでは運営資金が不足しているなかでいかにしてコミュニティ組織の活動を維持してきたのかについて、女性 A への聞き取り結果を示す。

上記のように、このコミュニティ組織は年に一度、成績が優秀な学生などを表彰するソマリランド功労賞を実施している。資金繰りが難しいなか、筆者がこのイベント経費の捻出方法を尋ねると、女性 A は次のように話した。

> それは寄付によるものです。私たちは、ビジネスをしている人たちなど、西ロンドンにいるソマリランド人に寄付を依頼しました。何人かの人びとは 500 ポンドを寄付し、他の人びとは、500 ポンドや 250 ポンドを支払いました。また、カフェにいる全ての男性は一人 20 ポンドを寄付し、カフェにいる人びとから約 300 ポンドが集まりました。そして、役員たちはそれぞれ 100 ポンドを寄付しました。ただ、全員が寄付したわけではなく、全くお金を出さない人びともいましたが。さらに、当日はチケットも販売しました[4)]。

この組織は、運営資金がないなかでもイベントを実施するために、人びとに資金提供を頼んだ。ここで注目すべきは、資金提供を頼まれた人びとによる献金によってイベントが実施されたことである。このことは、このコミュニティ組織の建物の一階正面にあるカフェの運営が厳しくなり、閉鎖を検討しなければならなくなった際に女性 A が述べた内容にも表れている。女性 A は、カフェの継続ができた際のことを、次のように話した。

> ソマリランドから来た人びとはとても優しく、お互いに助け合います。例えば、もし、あなたがとても困っていることを見かけたなら、私たちは集まり、互いにお金を出し合うというように。去年、センターにお金がなくなった時、私たちはカフェを閉鎖しようとしましたが、その時も 5000 ポンドの寄付を集めました。カフェにいた人びとは、カフェの継続を望みました。私たちは彼らに、5800 ポンドが必要だと伝えると、彼らはそれぞれが 100 ポンドを支払いました。このようにして、ソマリランドコミュニティ組織はここに居続けています。

このように、イベントの実施にしてもカフェの存続にしても、このコミュニティ組織は、必要に応じて献金により資金を集め、なんとか活動を続けてきたのである。そして、女性

---

4) ここでカフェとは、このコミュニティ組織の建物の一階正面にあるカフェのことである。

A はこの状況をソマリランド人が助け合う人びとであるという考えと結びつけている。下記の女性 B も、「人びとが互いに支え合うのはソマリ人の文化です」と述べ、助け合いによりコミュニティ組織の活動が可能になっていると考えている。

ただし、それはその場限りの一時的な資金集めに過ぎず、コミュニティ組織の安定した運営には結びついていない。メンバーシップ制度にしろ、献金にしろ、資金不足を根本的に解決するには至らず、あくまでも危機的状況への一時的な対応に過ぎない。この一時的な対応によって危機的状況をやり過ごす方法は、下記で述べる人員不足という課題にも当てはまる。

5.3. 人員不足への対応：単発的助け合い

資金不足という課題を抱えるこのコミュニティ組織は、資金面では人びとからの一時的な献金によりなんとか活動を継続してきたが、これについてこのコミュニティ組織を立ち上げた男性 A は問題意識を持っていた。男性 A によると、人びとの「助け合い」の考え方とコミュニティ組織の安定的な運営は異なる。男性 A はコミュニティ組織に必要な人材が不足していることを次のように述べた。

> 適切な人びとを見つけることは大きな挑戦でした。コミュニティ志向の人びとを見つけることは本当に大変です。コミュニティ志向の人びととは、コミュニティの共通の利益をケアする人びとのことです[5)]。

男性 A が言うところのコミュニティ志向の人びとを見つけることが難しい状況は、筆者がメンバーシップの作業をしていた時に、作業がスムーズに進まなかったことにも見て取れる。さらに男性 A は、コミュニティ組織の活動には平日の日中に事務局にいることだけではなく、週末の活動も含まれるが、これは人びとの単発的な助け合いでは成り立たないと話した。例えば、男性 A は運営資金があった時は週末にフットボールクラブを開催し、もう一人の男性と協力して隔週で運営を担っていたが、他に人材がいなかったことを課題として述べた。

男性 A に対し、筆者が人びとは「互いに助け合っている」と考えているにもかかわらずなぜコミュニティ志向の人びとがいないのか、ここでコミュニティ志向の人びととは何を意味しているのかを聞くと、男性 A は次のように述べた。

> 人びとは互いに助け合いますが、それは構造化されていません。その時に誰が来るかを予測することはできません。確かに、人びとは互いに助け合いますが、それはゆ

5) 男性 A が述べた“community minded people”という言葉を、本稿では「コミュニティ志向の人びと」と訳している。

るやかな方法を通じてです。例えば（ソマリランドでは）、近所に住む女性が出産する時、私の母はその女性の手伝いをしに行っていました。洗濯をしたり、家を掃除したりしていました。これはある種のボランタリーワークです。しかし、これはボランティアとは異なる考え方であり、ゆるいシステムです。この考え方は、神から報いを得ることです。ムスリムが他のムスリムを助けることは義務です。しかし、ボランタリーワークとは、組織化されたボランタリーワークを意味しています。これは私たちの文化には存在しないものです[6]。

この話に対して筆者が、ソマリ人がいうところの助け合いとボランティアは同じことを意味しているのかを聞くと、男性 A は次のように続けた。

それは同じではありません。なぜなら、ボランタリーワークは組織化されているからです。例えば、ボランタリーワークを行う人びとに対し、私は予測をすることができます。ボランタリーワークとは意志によるものです。しかし、私たちの文化では予測はありません。人びとはあなたのために行うだけです。ですので、彼や彼女が朝の 6 時に来て、午後 2 時に去るというようなことを予測できません。

男性 A は、コミュニティ志向という考え方を、ソマリ人が「助け合う」ということと、イギリスの第三セクターであるコミュニティ組織を運営する際に求められる「ボランティア」の違いを説明しながら、このように述べた。男性 A の説明は、上記のメンバーシップの管理について、誰が何の作業に責任を持つのかが共有されていなかったため、取り立ててこの制度への反対はなかったにもかかわらずメンバーシップ制度が機能していたのかどうかも把握されていなかった状況にも当てはまる。公的資金が減少し、人材を確保することが難しいなか、場当たり的な「助け合い」には限界があると男性 A は考えている。男性 A にとって、コミュニティ組織を安定して運営するためには、単発的な「助け合い」ではなく、制度化されたボランタリーワークが必要であり、コミュニティ志向の人びとの存在が不可欠なのである。

これまで見てきたように、このコミュニティ組織は一時的な助け合いにより、資金不足にも人員不足にも対応してきた。人びとは助け合いによって場当たり的に活動を維持させる方法を持ち合わせているため、なんとか危機的状況を乗り越えてきたのである。他方で、やはりこの方法は第三セクターの組織としての活動を根本的に安定させることには至っていない。

6) カッコ内筆者補足。

６．一時的対応に至る背景

なぜ、彼らの対応は単発的なものに止まるのか。従来の研究を踏まえると、母国での対立関係がソマリ人コミュニティ組織活動にも影響を与えるためだと考えられる。しかし、従来の研究の問題点は彼らの生活環境を看過していることである。そのため、コミュニティ組織活動を行う人びとの生活を見ることで、危機的状況に対して単発的な対応に止まる別の理由が見えてくると考えられる。ここでは上記の女性 A と、2010 年からこのコミュニティセンターで活動している女性 B の生活をもとに考察する。

上記のように、2015 年からこのコミュニティ組織の事務局コーディネータになった女性 A はスウェーデン国籍であり、2005 年からイギリスで暮らしている。女性 A は、出身地での紛争を逃れ、親戚が暮らしていたスウェーデンで難民となり、スウェーデンで高校と大学に通った。女性の家族はソマリランドについて女性に話したことはなく、女性 A の友人はスウェーデン人ばかりだったという。女性 A は、大学四年生の時に元夫と出会い、結婚した。当時、元夫はアメリカに暮らしていたため、女性 A はアメリカに移り住んだ。元夫は、他のソマリ人と関わることを好まない人物であり、同じ地域にはソマリ人は暮らしていなかった。ただ、当時、女性 A は家事と子育てをするばかりで、周囲の環境を詳しく把握していなかったという。アメリカで女性 A が妊娠中、家族内で問題が発生し、女性 A は姉が住むロンドンに移住した。移住した当初、女性 A は幼い子供たちを育てることに必死で、家とスーパーの往復をするのみだった。子育てに慣れてきた女性 A は、2010 年に友人に誘われ、近所で開催されたソマリランドの独立記念日を祝うイベントに参加したことで、はじめてソマリランドの存在を知ったという。その後、女性 A が住居問題で悩んでいた際に紹介されたのが、このコミュニティ組織であった。

女性 A のように、ロンドンのソマリ人女性の多くはシングルマザーとして子育てや家庭の責任を一人で担っているという特徴がある[7]。だからこそ、女性 A は近所に姉が住んでいるものの、一人で子育てをするのに忙しく、自宅とスーパーの往復をする生活をしていた。また、2010 年になるまで自宅の近くで何が起きているのかを把握する余裕もなく、ソマリランドの存在すら認識していなかった。女性 A は、一人で子育てをすることに限界を感じていると言い、ロンドンには精神的な病を抱えているソマリ人女性たちが多くいると話したことがある。この状況は、女性 B にも当てはまる。

出身地での紛争によって 1996 年からイギリスで暮らしている女性 B は、2010 年からこのコミュニティ組織の活動に携わってきた。女性 B は 2006 年にイギリスで出産し、一人で子育てをしている。夫はソマリランドにおり、一人の姉のみがロンドンに住んでいる。女性 B は娘の学校への送り迎えの合間を縫って、一日に四時間ほどこのコミュニティ組織

---

[7] Open Society Foundations（2015）はロンドンとレスターを含め、ヨーロッパの 7 都市でソマリ人の生活環境を調査した結果、全体的にシングルマザーであるソマリ人女性の数が増加していると論じている。

の活動を手伝ってきた。数名の女性たちとカフェを運営したり、会計係をしてきたという。女性がカフェを運営していた 2011 年から 2012 年にかけては、スタッフに交通費が支払われていたという。なお、女性 B は、筆者が調査をしていた当時は何かの役割を担っていたわけではないが、空き時間には事務局に出入りしていた。女性 B は上記の男性 A ともう一人の男性とともに、このコミュニティ組織の建物を整備したため、活動の存続に責任を感じていると話していた。また、女性 B は、イギリスは自分たちにとって外国であり、人びとは孤立しがちになるため、社会化する機会を提供するためにもこのコミュニティ組織が必要だと話した。

筆者が、女性 B にソマリランドとロンドンの生活の違いを尋ねると、女性 B は次のように話した。

> ここの生活は非常に忙しいです。全てのことを自分やらなければなりません。支えてくれる家族がいません。故郷ではもっとリラックスして生活しています。家族が近くにいます。ここでは孤独と言えるでしょう。ここでは人びとは別々の場所に住んでいます。家族がいない人びともいます。これは本当に大切なことです。ここでの生活は手に負えません。やりくりするのは簡単ではありません。体力的にも経済的にも、簡単ではありません。ここではたくさんのことをやらなければなりませんが、あちらではそうではありません。

女性 B が述べたように、ロンドンでの生活は体力的にも経済的にもやりくりするのは容易ではなく、人びとは別々の場所に住んでおり、生活が忙しいためになかなかお互いに会うことも難しいため、一人ですべてをこなさなければならない。

ある時、女性 B の一人娘とその友達を連れて、女性 B の運転で食事に出かけた際、女性 B は運転中にロンドンにて一人で子育てをすることの難しさやストレスを話した。女性 B の娘は、ソマリ料理を嫌い、ロンドンの若者たちが好む店で出される食事を好んでいたため、食事をした場所はソマリ料理を出す店ではなかった。女性 B は、娘を育てていると突然に怒りが心頭に発することもあり、一人で子育てをすることは本当に大変だと話した。そして、彼女の出身地では子育ては同じ地域に暮らす家族や親せきと共に行うものだと話した。

女性 B のように、ロンドンで子育てを一人でする女性たちは、近くに頼れる家族や親せきがおらず、ロールモデルも存在しないなか、様ざまな問題を一人で抱え込んでいる。女性たちはイギリスの福祉システムを利用することで、シングルマザーでもなんとか生活を成り立たせることができるが、子育てを含めた生活の全ての責任を担うことは容易ではない（須永 2020）。

女性 A や女性 B のように、ロンドンでコミュニティ組織の活動をしている人びとは、体力的にも経済的にも精神的にも余裕がないなかで、生活をなんとかやりくりしている。コミュニティ組織活動を担う人びとは、彼ら自身が生活を切り盛りするだけで精一杯な状況なのである。だからこそ、彼らのコミュニティ組織運営は、危機的状況にその場その場で対応するのが手一杯である。ゆえに、危機的状況を根本的に乗り越え、安定させた運営につながることは極めて難しいと考えられる。

7．おわりに

本稿は、第三セクターが危機的状況にあるなか、資金や人員不足の問題に、ソマリランド人コミュニティ組織がどのように対応しているのかを考察した。その結果、資金不足に対してはメンバーシップ制度の導入や献金活動が行われ、人員不足に対しては単発的な助け合いにより、危機的状況が乗り越えられてきたことが明らかになった。また、危機的状況への対応が一時的なものに至る背景には、コミュニティ組織活動を担う人びと自身が肉体的にも経済的にも精神的にも厳しい生活を送っていることがあると考えられた。

移民やマイノリティが抱える問題に対応するコミュニティ組織が全般的に困難な運営を強いられているなかで活動を継続している本稿で取り上げたコミュニティ組織は、母国で生じた対立関係が越境することに力点を置いてきたこれまでの研究に鑑みると、例外事例として位置づけられるかもしれない。しかし、そもそもロンドンで暮らすソマリ人たちにとって、コミュニティ組織の運営は新しい経験であるからこそ、これまでの研究とは異なり、どのように人びとが試行錯誤しているのかを示した本稿の考察は意義があろう。

ソマリランド人コミュニティ組織は、不安定さを内包したまま、その場その場で一時的な対応をすることで活動を継続してきた。それは、必ずしも安定した運営には繋がっておらず、問題の根本的解決には至っていない。他方で、システム化されていないからこそ、危機的状況に対応できてきたという側面もあろう。緊縮政策を続けるイギリスで、どこまでこのやり方が通じるのか。今後の活動にも着目していきたい。

参考文献

日本語文献

高橋誠一. 2020.「イギリスにおける実質的シティズンシップの保障とその今日的課題－ボランタリー・コミュニティ組織をめぐる政治／政策に着目して」『移民政策研究』12 号, 97-111 頁.

須永修枝. 2020.「英国ロンドンにいるソマリ人女性たちの生計活動」児玉由佳編『アフリカ女性の国際移動』223-256 頁, アジア経済研究所.

須永修枝. 2022.「ソマリランドの名の下での人びとの集散：Somaliland Society UK を事例に」『人文科学研究』第 77 号, 37–52 頁.

須永修枝. 2024.「祖国を志向することとコミュニティ組織活動：ロンドンのソマリ人コミュニティ組織活動の考察」『人文科学研究』第 80 号, 19-29 頁.

英語文献

Communities and Local Government. 2009. *The Somali Muslim Community in England: Understanding Muslim Ethnic Communities*. London: Communities and Local Government.

Griffiths, David. 1999. *Somali and Kurdish Refugees in London: Diaspora, Identity and Power*. A thesis submitted in fulfilment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy University of Warwick, Department of Sociology.

Hopkins, Gail. 2006. *Gains, Losses and Changes: Resettlement of Somali Women Refugees in London and Toronto*. Thesis submitted for the degree of DPhil in Geography University of Sussex.

Kleist, Nauja and Masud Abdi. 2021. *Global Connections: Somali Diaspora Practices and their Effects*. Rift Valley Institute.

Mayblin, Lucy and Poppy James. 2019. “Asylum and Refugee Support in the UK: Civil Society Filling the Gaps?” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 45:3, 375-394.

Open Society Foundations. 2014. *Somali in London*. New York: Open Society Foundations.

Open Society Foundations. 2015. *Somali in European Cities*. New York: Open Society Foundations.

the Charity Commission website,
https://www.gov.uk/government/organisations/charity-commission （2024 年 10 月 29 日最終アクセス）

Zetter, Roger and David Griffiths and Nando Sigona. 2005. “Social Capital or Social Exclusion? the Impact of Asylum-seeker Dispersal on UK Refugee Community Organizations.” *Community Development Journal*, 40: 2, 169–181.

統計資料

Office for National Statistics, 2014, “2011 Census: Small Population Tables for England and Wales: Table SP028, Country of Birth, Somalia”
https://webarchive.nationalarchives.gov.uk/ukgwa/20160202161652/https:/www.nomisweb.co.uk/census/2011/small_population （2024 年 10 月 30 日最終アクセス）